

ケアハウスへの転居と利用者の対人関係

土室 修

Move to a care house and Human relations with a tenant

Osamu TSUCHIMURO

要旨：本稿は、ケアハウスへの転居後の対人関係に視点をあてている。対人関係の不安や不満の背景には、表面的なつき合いや希薄さがあるのかどうか、あるとすれば、その背景には何があるのか、そのことが生活に影響するかどうか、この点を明らかにしている。そこで、先行研究を整理し、ケアハウスの利用者8名を対象として、面接調査を行った。その結果、対人関係は、交友関係がある者と、そうではない者にわけられ、その認識としては、「排他的である」、「どこも同じである」、「つき合い方が難しい」と感じている。そこには、「トラブルを避けたい」、「環境が変わった」、「コミュニケーションが円滑にできない」ことが背景にある。しかし、交友関係が形成されなかったり、不満があるからといって、生活に不満足であるとはいえない。以上のことが示唆された。

キーワード：転居 対人関係 不安 不満

Summary : This paper has hit the viewpoint to the human relations after move to a care house. Then, precedence research was summarized and interview investigation was further conducted to the user 8 of a care house. As a result, the following thing became clear. A tenant is divided into people who have a friend, and people who are not. The tenant thinks that human relations are difficult and exclusive. However, the life is satisfied generally. The above thing was suggested.

Keywords : Move Human relations Uneasy Dissatisfied

はじめに

ケアハウスは、特別養護老人ホームに入居するまでではないが、心身機能の低下が認められ、在宅生活には不安があり、なおかつ、家族による援助が困難である者が利用する施設である。この施設は、1989（平成1）年に軽費老人ホームの一つとして制度化された。

そもそも軽費老人ホームは、1963（昭和38）年に制度化され、その利用者は、心身の状況のみならず、住宅事情や経済上の理由によって、在宅生活を営むことが困難な者となっている。しかし、施設数をみると、B型は、1981（昭和56）年以降まったく増加しておらず、A型は、1990（平成2）年をピークに減少している¹⁾。もちろん、ニーズはあると思われるが、機能が不十分ではあったり、

ケアハウスの登場によって、伸び悩むことになる。

ケアハウスは、これまでの軽費老人ホームとは、構造、機能、性格などが異なっている。居住環境に配慮し、管理主義を取り除き、利用者の自主性を尊重し、在宅の保健福祉サービスを利用することができる。あたらしい型の施設であるのだが、はたして、利用者からみてケアハウスとは、どのような存在であるのだろうか。生活に満足し、不満はないのだろうか。

そこで、これまでのケアハウスの利用者を対象とした調査をみると、その様子がわかる。潮谷ら²⁾は、ケアハウス入居者の生活意識の調査をしているが、その「入居者の相談内容」をみると、健康、将来への不安、退所、入所者間の対人関係の不安があげられている。魚津ケアハウスのアンケ

ート調査結果³⁾によれば、「今の生活で楽しくないこと」として、大多数が、利用者間の人間関係、老化をあげている。ケアハウス入居者の生活意識に関する調査研究報告書⁴⁾の「ケアハウスでの生活の満足度」をみると、入所費、入浴時間、食事内容等に対する不満、入所者同士の人間関係に関する不満があげられている。いずれの調査でも、対人関係に関することが共通して取り上げられており、その割合が高くなっている。

ケアハウスは、居住環境には工夫がみられ、すべて個室であり、プライバシーへは配慮されている。その一方で、利用者間の対人関係には、不安や不満があるという。その背景には、何があるのだろうか。佐藤ら^{5) 6)}は、ケアハウスのサービスに対する評価と健康実態や、生活環境の視点について分析、考察し、竹嶋⁷⁾は、ケアハウスへの志向調査として、50歳以上の在宅高齢者に対し、入居希望を分析している。鎌田⁸⁾は、利用者の住居環境、設備水準、生活環境等について明らかにしているが、そのなかで、入居前後のケアハウスの認識にふれている。その認識の変化の一つとして、人間関係が取り上げられており、転居後の人間関係は、おおむね肯定的な評価になっている。だが、研究テーマの中心は、対人関係ではない。

先行研究をみると、対人関係に関することは、十分に明らかになっておらず、研究が蓄積されているとはいえない。ただし、対人関係にとって、物理的要因が重要であることは、すでに指摘されているが⁹⁾、ケアハウスを対象としたものではない。

そこで、本稿では、ケアハウスだけに限定することなく、ひろく先行研究をまとめ、そこから示唆を得たい。その上で、ケアハウス利用者の対人関係を、実証的に把握するために、非構造的な面接調査を実施することにする。

「他者との適正な心理的距離を考慮することが心身の健康を保つために重要である」¹⁰⁾にもかかわらず、研究が少ないのである。対人関係については、これからの分野であるとともに、生活の質の向上のためには、欠かせない課題である。

I. 転居と対人関係の関係

いくつかの先行研究をみると、対人関係のあり方には、転居が影響している。安藤は、転居の影響に関する研究の動向をまとめているが、「転居は、いずれの年齢においても、住み慣れた地域を

離れ、新しい地域での生活の再編を要するストレスフルな出来事である」¹¹⁾とし、さらに、高齢者にとっては、「危機的なものとなる可能性を秘めている」¹²⁾ことを指摘している。では、転居が与える影響とは、どのようなものなのだろうか。これまで、老人福祉施設や高齢者向け住宅の入居者を対象とした、転居や適応に関する研究があるので、それを検討してみたい。

児玉¹³⁾は、シルバーピアの入居者を対象とし、転居前後の変化をみている。そのなかで、「転居が居住者の社会的行動に及ぼす影響」の一つとして、「対人接触への転居の影響」を分析をしている。それによると、転居後の1日平均の言葉をかわす人数は、7.4人から4.1人に減少しているが、相談できる人や、気の合う人はいずれも増加している。ただし、「自主的な親睦会」、「自主的な催し物参加」といった付き合いはわずかであるとしている。転居によって、家族や友人、利用者間の対人接触は減少しており、さらに、深い付き合い、かわりが少なくなっている。次に、施設間を比較してみる。児玉¹⁴⁾は、高齢者向けサービス付き住宅と借り上げアパートの高齢者を比較し、「居住者の社会的行動の評価」をしている。そのなかの「対人接触」の状況を見ると、名前のわかる人、世間話のできる人、気のあう人がいる、相談できる人がいるのは、いずれも、借り上げアパートの高齢者よりも、高齢者向けサービス付き住宅の高齢者が高い割合を示している。また、1日平均言葉をかわす人数も、同様の結果がでている。その要因として、各種交流プログラムや共用空間の豊富さが影響していることを指摘している。

このことについて、小倉¹⁵⁾は、特別養護老人ホームの新入所者を対象としているが、やはり、初期適応の援助には、気持ちを通じあう対人交流の提供が重要であるとしている。初期適応期間は1～6ヶ月であり、この間に「つながり」が形成されていくという。このように転居後は、家族や友人、利用者間の対人接触が減少しており、利用者間の交流が形成されていないといえる。だからこそ、対人関係の形成の意図的な援助、あるいは交流のための場が必要なのである。これらの条件が提供されることによって、対人関係が好転することになる。

対人関係が好転すれば、さらに、高齢者に良好な適応をもたらすことになる¹⁶⁾。つまり、「適応」というのである。しかし、適応には、いくつ

かの要因がある¹⁷⁾。それは、転居の自発性、入居の予測や入居に伴う出来事のコントロールの可能性、入居前後の環境差が小さいこと、適切な入居準備教育、個人特性では、対人場面での自信や健康感、ある程度の筋力の保持、効果的なストレス認知・評価が影響している。入居後の適応には、複数の要因があるわけであり、対人交流の形成の有無は、転居後の適応の一要因にすぎないのである。程度の差はあろうが、適応への影響を与えていることは理解できる。

II. 先行研究の整理と課題

対人関係にとって、物理的要因が重要であることは、認められているが、転居との関連については、十分に検討されていない。そこで、先行研究を整理したが、高齢者向け住宅や老人福祉施設の利用者の対人関係のあり方には、転居が影響している。転居後は、転居前の対人接触が減少しているが、その後の入所者間のつき合いは増えている。だが、表面的つき合いであったり、深いつき合いがなされていない。そのための支援として、機会と場の提供が必要になってくる。

このような知見を得ることができたが、先行研究は、あくまで高齢者向け住宅などが対象であるため、ケアハウスの利用者には、そのまま該当するとはいえない。また、ケアハウスの機会と場の提供については、ほかの老人福祉施設と比べると、決して多くはない。すると、対人関係が好転せず、生活に不満をもつことになるのだろうか。このような課題がみえてくる。

以上のことから、本稿では、不安や不満の背景には、はたして対人関係の希薄さや表面的なつき合いがあるかどうか、あるとすればその背景に何があるのか。そのことが生活に影響するかどうか、この点に限定し、課題を明らかにしていく。

III. 調査概要

2001年の8月に、東北地方のあるケアハウスの利用者8名を対象として、非構造的な面接調査を行った。対象者は、職員に選定してもらった。これまでの調査結果をみると、量的調査が多いことから、利用者の声を反映させてくために、この方法を選択した。おおまかな質問項目として、転居前の交友関係、転居後の交友関係、対人関係の考え方、対人関係の捉え方、ここでの生活状況を語ってもらった。この語りを分析し、その結果は、

利用者の対人関係の状況、対人関係の認識について、対人関係の背景にあるもの、対人関係と生活のかかわりに分類し、検討していく。

IV. ケアハウスの利用者間の対人関係

1. ケアハウスならびに、調査対象者の概要

ケアハウスの入居定員は100名となっており、単身者だけでなく、夫婦世帯が入居できる。対象者は、いずれも単身者である。男性2人、女性6人であり、平均年齢は、76.5歳である。居住年数は、7ヶ月～4年4ヶ月となっている。

なお、転居には、移動の範囲から、施設内・施設間転居、住宅から施設への転居、住宅から住宅への地域内転居にわけられるが、ケアハウスの利用者は、住宅から施設への転居となる。また、転居の選択度をみると、強制転居ではなく、すべての者は自発的転居となっている。

2. 利用者の対人関係の状況

ここでは、利用者間の対人関係の状況をみていく。どのような対人関係を形成しているのだろうか。

(1) 友人がおり、その他の利用者との交流もある

友人はいるが、その数は多くなく、数名程度である。その友人たちとは、カラオケにいったり、ゲートボールをしたり、おはじきなどを楽しんでいる。食事も一緒である。Eさんは、信頼できる人が「一人」おり、尊敬できる「お婆ちゃまが一人」だけいるが、対人関係は積極的でありたいという。Eさんは、次のように語っている。

「この中では一人ぐらいですね、信頼できる。うち明けてお話ししてくれる人は、一人だけいます。あと尊敬できるお婆ちゃまが一人、92歳になるお婆ちゃまが一人、しっかりとした方で」

「私は、ざっくりとこう。それで、こういう性格でよかったら付き合っただけというほうだけどね。」(Eさん)

Bさんは、「いつも一緒にいるのは4～5人くらい」であり、Dさんは、「みんなここで知り合った人ばかり」の友だちがいる。Hさんは、「友達来るものだまっても。Hさんって。二人か三人毎日決まってくる」と話す。

このように、交友関係は認められるが、その

ほかの利用者とは、どのような関わり方をして
いるのだろうか。

「ご挨拶程度の人もあるし、もっとつつこん
でお話しできる人もあるし。やっぱりそれはど
こでも同じだと思いますけど。・・・おはよう
ございますとか、今日天気がいいですねとか、
雨降ったねとか、そんな挨拶は全員にしてい
ますよ」

「あえば挨拶はするべし、人とは朗らかにい
きたいべ。あえば冗談言って笑わせるべ。案外
社交的なんだ」(Gさん)

友人以外の利用者とは、挨拶を交わしたり、
立ち話をするぐらいである。そのため、部屋
に呼んだり、呼ばれたりすることはない。友人
とは深くつき合うが、その他の利用者とは、表
面的なつき合い程度である。

(2) 友人はいないが、ほかの利用者との交流は ある

友人とまではいかないが、食事をしたり、声
をかけたりする人はいる。だが、気軽につき合
う人がいない。Fさんは、次のように語ってい
る。

「親しくしている方は、特別ありません。コ
ーヒーサービスって1週間に一度、食堂でコー
ヒーサービスして下さるんですよ。それに出席
したい方はでて、ということなんですけどね。
そういうのに一緒に行く人はいるけど、それか
ら買い物に、時々。それも時々ですけど。何か
あれば飛んで行って軽い気持ちでおつきあいし
ている人はいません」(Fさん)

Aさんは、「グランドゴルフ、相棒がない
から一人でやっている」と語っており、ここ
には友人がないようである。だが、「結構、人
とつき合ったつもりでいた」といい、そもそ
も人づき合いは嫌いではない。むしろ交流した
いと考えている。

「俺が今まで生きてきた中では、老人クラブ
でも、町内会でもね、いやな人は別だけでも、
でなかったら、この人とも、この人とも、みん
なとつき合っているでしょう。この人とは一生
懸命お話しするけども、あとの方とはお話し
しないというんじゃない」(Aさん)

しかし、交友関係は、まだ、形成できてい
ない。

3. 対人関係の認識について

多くは、対人関係を形成しているが、そのこ
とについて、どのように認識しているのだろうか。
利用者の認識をみていく。

(1) 排他的である

声をかけたり、交流を図ろうとするが、それ
が受け入れられない。Aさんは「もっとフラン
クなとこがあってもいい」と感じているが、つ
き合いづらいとは思いたくないという。

「ここへ来たら、同じ世代の人間だけれど、
つき合いづらいとは思いたくないね。・・・で
も、あんまりお話がないね。気があった人は、
女の人は、気があった人と話している。男はあ
んまり話しをしない。この人とお話しするけど、
あとの人とは何も話さないっていうのは、何か
ね。私の感覚でいえば、佐藤さんがいようと、
伊藤さんがいようと、この人が座っていれば、
この人の前に来て、毎日暑いとか、寒いとか、
名前なんかわからなくても。それが、老人クラ
ブとか町内会とかだったら、そういうことない
でしょう」(Aさん)

排他的になるのは、それぞれがグループを形
成しているためと、Eさんは考えている。そし
て、グループ同士の葛藤があるという。

「上っ面は皆さんやっていますけど。それで
何か飛び抜けてあれば、足引っ張るっていうん
ですか。排他的になっちゃうんですよね。
・・・来たばかりの時、ずっとありましたよバ
ッシング、きつかったですよ。・・・こそこそ
グループもってあれして、あの人はあだから、
こうだからって・・・」(Eさん)

Cさんは、交流を図ろうとしているが、それ
がうまくいっていない。

「お部屋にお茶のみにいらっしゃいといっ
てもあまり来ないし。どうなのか、行ってお茶
もらうと自分も呼ばないといけないと思うのか、
それはわかりませんがね。あまり来られない
から、また、私もそう無理にあれしませんけ
どね」(Cさん)

(2) どこでも同じである

Bさんは、対人関係は「難しい」としながら、
それはどこにでもあり、特別ではないという。

「人間関係っていうのは、職場でも普通の町
内の中でも、やっぱりあると思いますよ。なけ
ればおかしいんじゃないですか。だから挨拶す
るのを待っているじゃなくて、自分から挨拶し

ていく気持ちをもつことが大切」(Bさん)

Bさんは、どこにでも対人関係があるからこそ、積極的な交流が大切と考えている。それは、Bさんの生き方にも共通している。

「あまり、過去を振り返ったり、先々のことを考えてもだめだからね。あんまり考えすぎないように、まず、今日のことを大事にして、明日につなげていくことが大事だ」(Bさん)

(3) つき合い方が難しい

Gさんは、「干渉しない」ことにし、つき合いをしている。「100人いれば100通り」の性格があるわけであり、つき合い方が難しいからこそ、気を配っている。

「私は干渉しない。人の噂とかそういうのには絡まないし。人のことを言えば次言われるものだから。そういう気持ちでいる」

「兄弟だって10人いればみんな違うんだからよ。ましてや、集まってきた人、同じになるなんて、できないっていうんです」

「言ってはならないって、つつい口でるからな。いけないことを口にだす」(Gさん)

だから、よけいにつき合いが難しくなる。

Dさんは、「対人関係は難しい」といい、それは、年をとってから「猫かぶる」人もおり、「いい人ぶっている人」もいるからであるという。対人関係を良好にするには、その点を見極めることである。

「あんまり深くつき合わないように、つき合っているけどな。浅く広く。これがやっぱり知らない人と付き合う基本だ」(Dさん)

4. 対人関係の背景にあるもの

対人関係は狭く、表面的なつき合いが多いが、その背景を考えてみたい。

(1) トラブルを避けたい

開設時は、いろいろな人々が集まり、楽しく過ごしていたが、やがて、さまざまなトラブルが露呈することとなる。そのような経験から、トラブルを避けるために、あえて深いつき合いをしないようになっていった。

「知らない者同士、三日ぐらいして、親兄弟から家の財産から教えれば、次の日になれば、言って歩く人いるわけだ。それがまた、トラブルのもとで。なんぼ喧嘩したり、何回トラブル起きたか。だんだん最近それがわかってきて、(今は)なくなってきているけど。それが、本

当だども。ここさ来て、誰も知らなくて、嘘ついてほらく人もうんといるわけ」(Dさん)

Gさんは、人の噂には絡まないが、それは「聞いたとおりにしゃべるひとはいない」と考えている。Hさんは、「100人いれば、人間関係は難しい」といい、うるさく言われたり、噂を立てられることから、対人関係に消極的になる。

「いじめだって、みんなあるもんだ。そういうことだって。ただ言わないだけで。事務所にいっても何ともなんないし。自分で我慢して、ここに居て」

「部屋には遊びに行かないもの、どこにも。うるさいから」(Hさん)

(2) 環境が変わった

これまでの職業歴、家庭環境、居住環境はさまざまであり、どれをとっても同じではない。しかし、この居住環境に転居し、それが、影響している。

「100人おるでしょう。100人おってね、変なのばかり、100人ここに来るわけないからね。ここへ来れば何もありません。物置もないし、小屋もないし。今まであれほど大きいお家に住んでいた人がね、8畳一間ではね。だから、この方は、こういうひとではなかったけれど、ここへ来たら、あまり物をいなくなっただけで、今そう思っている」(Aさん)

さらに、Aさんは、家族や健康が影響しており、心配事があるから、いまの生活状況や対人関係に積極的になれないと考えている。

「家族が家が健康がどうしてどうして、なってきたことが影響しているんじゃないかと思う」(Aさん)

(3) コミュニケーションが円滑にできない

身体の衰えによって、言語的コミュニケーションが円滑に図ることができなくなった。Cさんは、そのことによって、孤独になっている。

「だいたい用事があれば、みなさん廊下で立ち話をしたり、何かしてられる、それで済むんでしょうけど、私立っていられませんから。立ち話をしているけど、これが聞こえませんか。いつも、そういう点になると、会話が思うようにできないから、孤独を感じますけど。・・・一対一で会話すればどうやら、こうやらできますけど、雑談ができないんです。お話ししている人が、私がここにいるでも話しをしても、

ちょこちょこと聞こえても、内容がはっきりしませんから、会話のなかに入れませんので」(Cさん)

また、入居年齢は60歳以上であるため、年代に相違がある。一口に高齢者といっても、年齢層には幅があるため、趣味、話題などにおいて、共通点がみつけにくい。それが影響し、コミュニケーションを阻害している。

「年代の相違と、それから私たちよりずっと年上の人でも3分の2はいるからね」(Bさん)

5. 対人関係と生活のかかわり

対人関係のあり方と、日常生活の関連について考えてみたい。

(1) おおむね満足している

Dさんは、「対人関係は難しい」し、いろいろな人がいるが、良かった、満足している。これは、Cさんも同じである。

「過ごしやすいよ。私の場合は。様々な人がいるけど、私はいいと思うな。ご飯と、冬は暖房だべ、暖かいもの。そういう面では。思いがけなく居心地いいっていうかな、私はいつも、いい方、いい方さ解釈する方だから」(Dさん)

「私はよかったなっておもっています。また、ここでの皆さんが面倒見てくれるのはもったいないくらいだと思っています。長い間一人暮らしでしたから、何から何まで一人でやってきたから、ここに来ると上げ膳据え膳ですし、事務所の方たち親切にしてくれますので、よかったなって喜んでます」(Cさん)

Bさんは、今は良かったというが、その一方で「慣れた」という。その過程を語ることはなかったが、紆余曲折があったことだけは、推察される。

「わたしは、4～5年も入っているものだから慣れましたよ。今はここに住まわれてよかったと思います」(Bさん)

Gさんは、生活には「満足」しており、「これで不足なら行くところがない」というが、その一方で、心構えがいるとしている。

「こういう生活は、集団に入って、相当の心構えでなかったら、口軽くできない。あと、尾ひれつくでしょう」(Gさん)

(2) 戸惑いがある

Hさんは、「どっかあれば行きたいなと思う」こともあり、転居を考えたこともある。ここで

の生活に慣れないのか、対人関係のトラブルから、肯定的には捉えていない。Aさんは、「何かが違う」と感じている。

「あの、俺の生きてきた、同じA市だけでもね、何だか違うなって。私の常識だったらこうだと思っていたのが、あれっ、何か違うな」

「私はね、別に医者にかかっているわけでもないし、こんなところにいるより、家にいる方が面白いんですよ。・・・田舎の部落で過ごしてきた人は、お婆ちゃんは気が休まらないだろうと思うけどね」(Aさん)

しかし、転居までは考えていない。あと「数年すれば慣れるんでしょうか」と感じており、戸惑いがみられる。

「えらいとこに来たっていう意味じゃないんですからね。私が慣れないっていうことで、嫌だなんていう感じはぜんぜんないんです」(Aさん) Eさんも同じように、その厳しさを語っている。

「身体が元気、それから頭も大丈夫。それとあとは、それに耐えていく、集団生活に耐えていく協調性。その三つがなかったら、ここへは入ってこれない。・・・田舎のお婆ちゃんじゃ耐えられないかもしれない」(Eさん)

V. 考察

1. 対人関係の状況と集団規範の影響

交友関係を形成していても、利用者間のつき合いは、難しいという。だからこそ、あまり干渉しなかったり、広く浅いつき合いになっている。このような考え方は、転居後、ケアハウスの生活のなかで、身につけたものだろう。だが、根本的には、人付き合いを拒否したり、否定しているわけではない。

一方、入居年数が短く、対人関係が形成できなければ、そのような考え方に戸惑い、さらには、排他的にみえてしまう。

なぜ、このような差が生じるのだろうか。そこには、集団規範の影響がある。ケアハウスは、組織的集団¹⁸⁾であるため、当然、集団規範がある。本稿では、規範に言及しておらず、明言することはできないが、「干渉しないこと」や、「広く浅いつき合い」が、それに近いものではないだろうか。転居者は、自分の価値観とは異なっている、あたらしい集団の規範を身につけ、同調することによって、適応していく。しかし、この過程におい

て、規範を受け入れられず、同調できなければ、適応が難しくなる。Aさんは、ほかの利用者に「もっと交流があつていい」と話したところ、「おまえ変だよ」といわれている。Aさんは、ここの規範に同調できず、ほかの利用者からみると、Aさんは、非同調的にみえる。このズレに、Aさんは戸惑っている。「私も何年かいれば、ここにどっぷり浸かってしまう」のかどうか、それでいいのか悩んでいる。

とくに、Aさんは、転居後、約半年しかたっていない。規範を受け入れるには、個人差はあろうが、時間がかかる。Bさんは、転居後約4年が経過している。ここでの生活に「慣れました」というが、その意味を聴くことはできなかった。だが、これまで過程には、戸惑いや葛藤があったかもしれない。

対人関係の形成には、集団規範がすべてではないが、その影響がある。

2. 対人関係の背景にあるもの

表面的なつき合いが多いが、その一つとして、トラブルの回避があげられている。つまり、対人関係の葛藤が生じるのであれば、あえて、踏み込んだつき合いをせず、広く浅いつき合い方を選択するのである。それが、対人関係を円滑にしていくなための方法というわけである。なぜ、このような考え方を選んだのか。

それは、これまでの経験からもたらされている。Hさんは、多くを語らないが、対人関係のトラブルがあつて、対人関係に消極的になっている。Dさんは、他者の言動をみて、対人関係に慎重になったり、気をつけるようになっていく。いずれも経験の蓄積からもたらされている。このような個々の意見や考えは、やがて一つのまとまりになり、斉一化をすすめて、行動標準となる。それが、規範に発展していくわけだが、根本には、過去の経験があるといえる。

次に、対人関係の不安や不満には、環境の変化が影響している。転居とは、それまでの関係やつながりが断ち切られることであり、転居先では、あらたな関係を再構築することになる。とくに、物理的環境が変化することで、適応できなくなったり、不満をもつようになる。それが、対人関係に影響するというのである。たしかに、対人関係の構築には、物理的要因が重要であるが、そのことがあらためて、指摘されたといえる。

さらに、コミュニケーションが円滑にできないことが、対人関係の希薄さにつながっている。このなかには、個人的要因と利用者の属性が含まれている。個人的要因とは、心身の衰えであり、それが、円滑なコミュニケーションを阻害している。利用者の属性には、性、年齢、出身地などがあり、これらの異質性が影響している。

3. 対人関係と生活の関連性

対人関係の考え方は、それぞれ異なり、思いはさまざまである。だからといって、それがすぐに不満につながるとはいえない。Hさんは、転居を考えたことがある。だが、実行してはいない。Aさんにしても、戸惑いがあり、交流が図れないとはいえ、転居を考えているわけではない。多くの者は、生活に満足しており、認知的評価は、プラスに作用している。

そこには、ケアハウスの性格が影響しているだろう。ケアハウスは生活の場であるが、終身施設ではなく、通過施設である。入居条件に合致しなくなれば、いずれは退居することになる。それが、不安につながっているのだが、まずは、永続的な居住ではないことが、割り切った考えのもとに、対人関係を成立させている。そして、自由が多く、集団行動を強制されないこともある。

実際、普段の生活は、自由意志に任されており、転居前の友人・知人、家族とは、交流を続けることができる。接触回数は減少しているが、手紙のやり取りや、電話をかけたり、来訪を受けることもあり、転居前の対人関係は、継承されている。それが励みになったり、支えになる。このことが不安や不満を回避させているのではないだろうか。

次に、サービス提供との関係はどうだろうか。基本的なサービスのほかは、年間行事、お茶や合唱の時間が設けられている。参加は、自由意志であるが、参加者は、いつも決まっている。つまりすでに友人同士が参加しているため、そこから、交友関係の広がりがあるかといえば、それは疑問である。とくに、インフォーマルな関係は、人為的に形成されるものではない。

よって、いまのサービス提供のあり方では、場の提供はできるが、交流を促進することは、難しいのではないか。だが、このような機会が不必要というのではなく、どのようにすれば、交流促進を図ることができるか、検討しなければならないだろう。

謝 辞

本稿をまとめるにあたり、ご協力いただきましたケアハウスの職員、利用者の方々には、感謝申し上げます。

注

- 1) 厚生統計協会：国民の福祉の動向，2001
- 2) 潮谷有二，児玉桂子：ケアハウスの評価と環境計画，高齢者住居環境の評価と計画，太洋社，1998
- 3) ケアハウス入居者の生活意識に関する調査研究委員会：ケアハウス入居者の生活意識に関する調査研究報告書，1996
- 4) 前掲3)
- 5) 佐藤衛子，佐藤了子，佐々木久長：ケアハウスにおける生活に関する研究Ⅰ，聖霊女子短期大学紀要第27号，1999
- 6) 佐藤了子，佐藤衛子，佐々木久長：ケアハウスにおける生活に関する研究Ⅱ，聖霊女子短期大学紀要第27号，1999
- 7) 竹嶋祥夫：高齢期の住まい方とケアハウスのニーズに関する研究，老年社会科学，第20号第2号，1998.12
- 8) 鎌田清子：新しい軽費老人ホーム「ケアハウス」に関する調査研究，北海道栄養短期大学研究紀要第13号，1993
- 9) 城佳子，児玉桂子，児玉昌久：高齢者の居住状況とストレス，老年社会科学第21号，1999.4
- 10) 前掲9)，p39
- 11) 安藤孝敏：地域老人における転居の影響に関する研究の動向，老年社会科学第16巻第1号，1994.9，p59
- 12) 前掲10)，p59
- 13) 児玉桂子：高齢者専用住宅への転居と環境適応，高齢者住居環境の評価と計画，太洋社，1998
- 14) 児玉桂子，田村静子：高齢者向けサービス付き住宅の計画と評価，社会福祉の現代的課題，サイエンス社，1993
- 15) 小倉啓子：特別養護老人ホームの新入居者の生活適応の研究，老年社会科学第24巻第1号，2002.4
- 16) 前掲15
- 17) 前掲14
- 18) 星野貞一郎編集：保健医療福祉の社会学，中央法規，1998